

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ

YOKOHAMA EYE'S 2023

ヨコハマアイズ 2023



YOKOHAMA
EYE'S 2023

テーマ ありのままにいられる

特集① 性の多様性を考える

エンパワメントセミナー

「知っておきたいLGBTQ ～自分らしく生きる～」講演録(要旨)
清水 展人 (日本LGBT協会代表理事)

身近な大人が理解者になってほしい
～性の多様性を前提とした子どもとの関わり～
遠藤 まめた (一般社団法人にじーず代表)

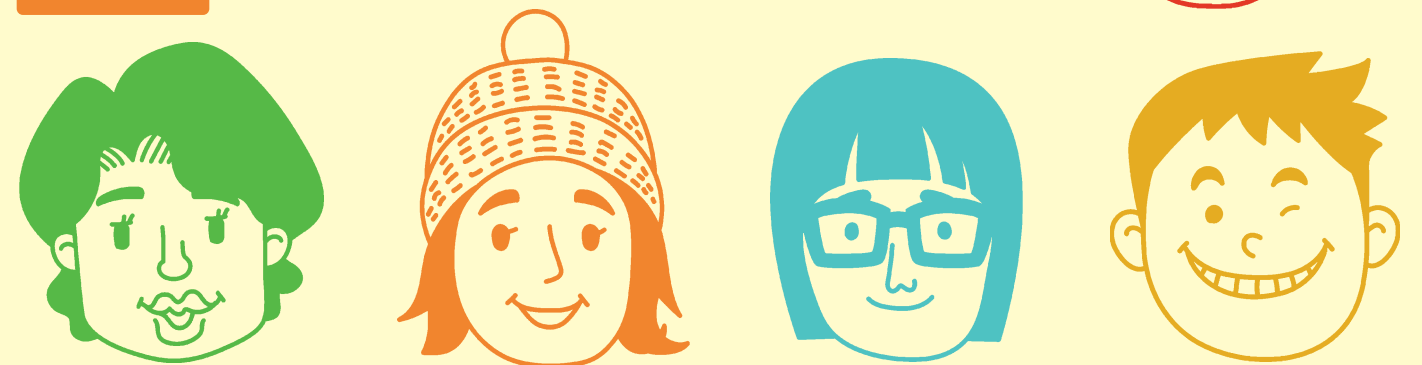
特集② こども・若者一人ひとりの個性・生き方・学び方を考える

学校教育に対する外部参入の必要性について
小市 聡 (特定非営利活動法人体験活動サポート開港場代表)

一人ひとりの個性を大切にしながら多様性を尊重できる場
廣瀬 貴樹 (一般社団法人かけはし代表理事)

子どもの未来をつなぐ「かけはし」に
～一般社団法人かけはし 代表理事 廣瀬貴樹さんへのインタビューを通して～
中家 未優 (神奈川大学国際日本学部日本文化学科)

データで見る 青少年 高校生の体験活動等に関する実態調査



はじめに

「YOKOHAMA EYE'S 2023」をお届けいたします。

昨年4月、すべてのこどもが将来にわたって幸福な生活を送ることができる社会の実現を目指し、こども基本法が施行されました。こども基本法の理念を実現するためには、こども若者ひとりひとりが大切にされ、「自分らしくいられる」ことが不可欠です。このため本号ではテーマを『ありのままでいられる』とし、青少年の多様性を尊重した活動や取組みに焦点をあてました。

特集1では性の多様性を取り上げました。

日本において自らのセクシュアリティをLGBTQ (L:レズビアン、G:ゲイ、B:バイセクシュアル、T:トランスジェンダー、Q:クエスチョニング) と認識している人の割合は、調査結果によって異なるものの人口の10%近くいると言われていています。しかし、彼らが学校や社会で直面する偏見や差別は未だに多く、それに対する正しい理解やサポートが十分ではないのが現状です。

講演録としては、自らが当事者でもある、一般社団法人日本LGBT協会代表理事 清水展人さんにご講演いただいた今年度の子ども・若者エンパワメントセミナー「知っておきたいLGBTQ～自分らしく生きる～」を掲載いたしました。

また、LGBTQをはじめとする性的マイノリティーの子どもや若者の支援や居場所づくりに取り組む一般社団法人にじず代表の遠藤まめたさんに、LGBTQ当事者の子ども・若者にとって安心して話せる大人であるために大切なことをうかがいました。

特集2では、多様な他者とともに生きる社会の中で、こども・若者一人ひとりの個性・生き方・学び方を考えることをテーマに捉えました。

ここでは、「ありのままでいられること」、「ここにいていいと安心できること」を大切に、体験活動の機会や場づくりに取り組まれている「特定非営利活動法人体験活動サポート開港場」代表の小市聡さん、「一般社団法人かけはし」代表理事の廣瀬貴樹さんにご寄稿いただきました。さらに、廣瀬さんに大学生がインタビューし、かけはしの活動や今の思いについて学生の目線から感じたことをまとめてくれています。

また巻末には、高校生の体験活動等に関する実態調査の結果を掲載しました。コロナ禍を経た高校生たちの放課後や休日の過ごし方を考察する際の参考にしていただければ幸いです。

これからもよこはまユースは、青少年ならびに市内青少年団体のサポート役としてその役割を担ってまいります。皆様におかれましては引き続き横浜市の青少年活動にご理解・ご協力をお願い申し上げます。

2024年3月末日
公益財団法人よこはまユース
代表理事 大向 哲夫

テーマ ありのままにいられる

特集① 性の多様性を考える

2023年度 子ども・若者エンパワメントセミナー

「知っておきたいLGBTQ ～自分らしく生きる～」講演録(要旨)

清水 展人(日本LGBT協会代表理事) 04

身近な大人が理解者になってほしい

～性の多様性を前提とした子どもとの関わり～

遠藤 まめた(一般社団法人にじーず代表) 08

特集② こども・若者一人ひとりの

個性・生き方・学び方を考える

学校教育に対する外部参入の必要性について

小市 聡(特定非営利活動法人 体験活動サポート開港場代表) 11

一人ひとりの個性を大切にしながら多様性を尊重できる場

廣瀬 貴樹(一般社団法人かけはし代表理事) 14

子どもの未来をつなぐ「かけはし」に

～一般社団法人かけはし 代表理事 廣瀬貴樹さんへのインタビューを通して～

中家 未優(神奈川大学 国際日本学部 日本文化学科) 17

データで見る青少年

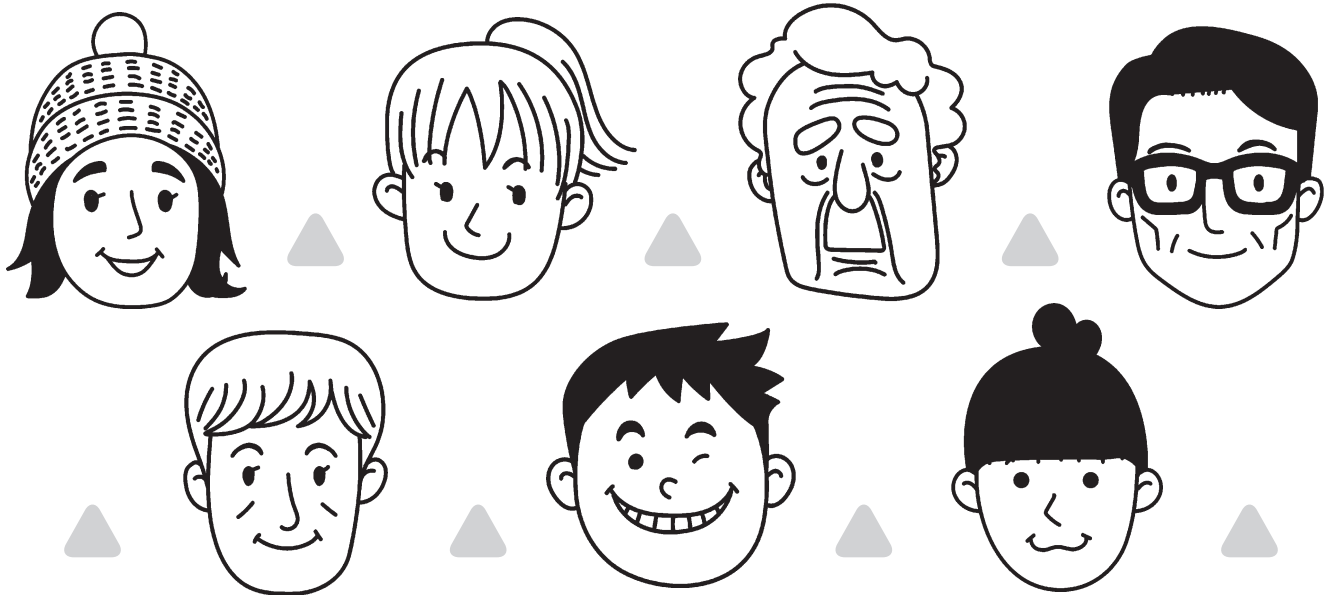
高校生の体験活動等に関する実態調査 19

2023年度 子ども・若者エンパワメントセミナー

「知っておきたいLGBTQ ～自分らしく生きる～」講演録 (要旨)

日本LGBT協会

代表理事 清水 展人



【性の多様性とは】

今日は性的マイノリティ当事者でトランスジェンダーである私の実体験をもとにお話します。

自分が性について悩んだ時に自分の親にカミングアウトできる人は10代で11.5%、つまり9割近い人は親に言えないというデータがあります。親以外にカミングアウトできる人は10代では41%でした。私もそうでしたが、本当は身近な人に助けを求めたいし一番理解してほしいのに、身近であるほど拒否された時に怖くて言いにくいということを皆さんに知っていただきたいのです。そしてそんな子ども達が皆さんのような存在に助けられることもあると思います。LGBTの講演を聞いてきたとか、本を読んだよということを伝えるだけでも、子ども達にとっては相談しやすい存在として大きな役割ができると思います。

WHO (世界保健機関) は、私たちの性は男か女、ゼロか100かで単純に分けられるものではなく、グラデーションがあると述べています。世界でも多様性のシンボルとして虹色が使われているように、一人一人に色々な個性があるという理解が変わってきています。性の多様性を示す要素は4つあるとされていて、まず「性的指向」は自然と

好きになる人、恋愛感情がどの性別に向いているかということですが、例えば女性の体の人で性的指向は女性戸籍の人という方もいれば、男性の体で生まれた人が好きという方もいます。男性も女性も好きになるバイセクシャルの方や無性愛者 (アセクシュアル) の方もいて、グラデーションは本当に様々です。皆さんはどんな性的指向をお持ちですか。そしてもし誰かにそれはおかしいと言われたとしても、簡単に変えられるものではないということにも気づくと思います。ですから生まれや国籍、肌の色と同様に、持って生まれた性的指向による差別もあってはならないのです。

2つ目は「性自認」、ジェンダーアイデンティティとも言われます。つまり自分の性をどう認識しているかということですが、自分は100%男です、100%女ですと言い切れる方もいれば、迷っていたりどちらとは言えなかったりする方もいます。私も幼い頃から自分の認識している性が自分の体と一致していないと感じていて色々な努力もしましたが、これは自分の心が自然と認識しているものなので到底変えることはできませんでした。法務省では特にこれら2つを人権課題としています。

3つ目は「性表現」で、髪型や服装、仕草といった外

部的な表現のことです。最近では私服で通える学校や、ジェンダーレス制服を採用する学校や企業が増えたり、呼び方を「さん」付けに統一したりすることも広がってきました。誰もが不安なく、本当はこんな服が着たいとか、こんな呼び名で呼んでほしいということを周りに伝えられればよいのですが、先ほどのデータのように声に出せない子も多いということを前提とすれば、大人が環境を作っていくことが重要です。私自身も水着が着られなくて水泳の授業を休んだり、反省文を書かされたりしたことがありました。でも環境を整えば少し気持ちが楽になって学校に通いやすくなる子が増えたり、みんな一緒に学ぶ機会を作れたりするのではないのでしょうか。

そして最後の要素は「性的特徴」です。体の性のグラデーションとも言われ、例えば身長や体重、ホルモン値、筋肉量など、皆さんにもあるものです。私は講演先で男性更年期障害や男性不妊症、子宮がんなどの悩みを打ち明けられたことがあります。やはり性のことは周りに話づらいのだと感じます。最近では保健の授業で男女一緒に月経について教わることもありますが、体のことを学ぶことは決して恥ずかしいことではなく、とても大切なことだと思います。

ところで皆さんは自分の周りにLGBTに該当する方がどのくらいいると思いますか。さまざまなデータがあって海外では10%以上などとも言われますが、8%くらいとか、左利きの人や血液型がAB型の人と同じくらいの割合でいるとも言われます。皆さんも周りの子ども達の服装や仕草、体つきといった身体的特徴は目に入りやすいと思いますが、今人権課題になっているのは「性的指向」と「性自認」、つまり目に見えないところです。その子がどんな人を好きで、どういう性で生きていきたいと思っているかは小さい子ほど見えにくく、特に中学生から高校生の時期に形成されていくとも言われています。

もし皆さんが私とすれ違ったらトランスジェンダーだと気づきますか？例え気づかなくてもそこにいない訳ではなく、40人の学級なら3、4人の性的マイノリティの子どもがいてもおかしくないのです。ですから子ども達が安心してこの人だったら話せる、信頼できそうと思える環境を作って

いくためには、側にいるという意識を皆が持つておくことが非常に重要です。なぜならLGBTに該当する子ども達は小学校高学年や中学生の時期にいじめや暴力を受けやすいというデータがあります。特に多いのは言葉による暴力です。知らなかったとか悪気はなかったということもあるかもしれませんが、性的指向が同性やバイセクシャルの方の64%、私と同じように違和感を持つ子ども達では58.6%が自殺を考えたことがあるという非常に重いデータもあります。命に関わる問題なのです。

では私達に何ができるのか？まず学校では先生の研修機会を確保して、みんなで連携して支援できるようにしなければいけません。さらに児童生徒の学習の場を確保することも大切です。今日は皆さんに「大人は最大の、子ども達にとっての教育環境である」という言葉をお伝えします。結局大人が普通や当たり前と思っていることが自然と無意識に口や態度に出ることで、それを元にルールや制度、環境が作られていくと思うのです。ですから大人達の普通や当たり前を社会に合わせてブラッシュアップさせていくことが非常に大切です。

【自分らしく生きる】

ここからは私の体験談をお話しします。私は兵庫県で社会科教員をしていた父と保育士の母のもとに三姉妹の長女として生まれました。私は幼い頃からかっこいいものや外遊びが大好きで、服装もズボンを履きたがりました。幼稚園の先生からおまごことや人形遊びに誘われてもやらなかったし、女の子用の水着を着るのも嫌でした。先生からは、みんな着替えているのにどうしてヒロちゃんだけできないのと言われてしまい、母からもお願いだから先生を困らせないでと言われてきました。結局無理やり着替えさせられてプールに投げ入れられたことは今でもトラウマです。卒園式では母から、女の子はみんな可愛い服を着てくるから今日だけは我慢してねと言われて渋々スカートを着ました。七五三さんの時には父から「ヒロちゃん、赤かピンクどっちにする？」と言われ、その二択？と思いました。ピアノの発表会では祖母がワンピースを手作りしてくれて、私は大好きなおばあちゃんを悲しませるわけにはいかない

からと嫌々着ました。誰も悪気はないし私を大切に思ってくれてのことでしたが、やはり女の子はこうという固定されたイメージが非常に強かったと思います。

岡山大学病院の調査では私のように小学校入学前から違和感を持っている人は56.6%と言われていて、早くから気づいて訴えていることがあります。私も小学校時代は自分らしくてカッコいいと思うズボンを選び、髪型もショートカットでした。それでも友達から、ヒロちゃんは女の子なのにどうしてスカート履かないの？髪を伸ばさないの？などと言われると、やはり私は何か悪いことをしているのかなと思うこともありました。

そんな中、4年生の時に事件が起きました。学校の帰り道に同級生から急に指をさされ、「ヒロちゃんって男みたいやな、おとおんな!」と言われて逃げられたのです。私は固まってしまいました。言い返すこともできずショックを受けてそのまま家に帰ると、父や母がいつものように今日はどうなことがあった？楽しかった？と聞いてくれましたが言えませんでした。私も親に言えない9割の方だったのです。結局先生にも相談できず、そのまま状況はさらに悪化して、ひどい時は学校内でもオカマ、おナベ、ゴリラと言われて逃げられたりすることが中学まで続きました。それでも何とか学校に通えたのは、私を気にかけて一緒にいてくれる仲の良い友人がいたからです。

いいこともありました。小学校の卒業式の時、私は両親に言いました。幼稚園の卒園式みたいにスカートは無理だよ、ずっと六年間ズボンを履いてきたのだからと。親は悩んだ末、ヒロちゃんの一生に一度の卒業式だから好きにさせてあげようと言ってくれました。それでもネクタイを締めて卒業式に出たらみんなからどう見られるだろうとドキドキしましたが、自分らしく胸を張って体育館を歩けたことは今でもすごく嬉しい思い出です。ただ中学生になると私はもっと困ることになってしまいました。

まず制服でつまづきました。入学案内には「女子の制服はスカート、男子は学ランです。いつまでに採寸に来なさい。」とありました。もし皆さんがずっとズボンで生活していて、それを急に来週からスカートを履くのがルールですと言われたらどうでしょう。私はそんなの無理、スカート

なんか履いたら私じゃないと思いましたが、結局採寸に行って入学式を迎えました。さらには体の違和感も出てきて、そして私が好きになる相手は小学生の時からずっと女の子でした。でも授業で学ぶのは異性愛の話ばかりで、私は自分らしく生きていけないのではないかと思いました。将来のライフプランについて、いつ頃に男性と結婚して、いつ頃子どもを持ちたいか発表する授業がありましたが、やはり自分の思っていることをそのまま伝えるのは難しかったです。私は嘘をつき、将来は普通のおばあちゃんになりたいなどと適当に言って授業を何とかやり過ごしていました。

本当はありのままの自分を肯定したいのに、嘘をつきながら自分を否定して、このままの自分では生きていけないのだということを突きつけられているような状況でした。自信をどんどんなくした私は髪を伸ばしたり、大好きなズボンを捨ててスカートや化粧道具を買ったりしました。高校ではセーラー服にルーズソックスで女の子らしく振る舞おうとしましたが、中学の時のように陸上部の部長や生徒会、ボランティア活動をやるような力は全く湧いてきませんでした。何とか授業は受けていましたが家に帰ると部屋に引きこもり、私がこの世に生まれてきたことは喜ばれていないのではないかなどとネガティブに考えてしまいました。好きな人の話や将来の夢を誰にも相談できないことがすごく苦しく、私は図書館で詩集や人権、心理学などたくさんの本を読みました。そうした中で、「乗り越えられないものは与えられない」という言葉や、ありのままの自分を大切にしようとか、私達みんなに幸せになる権利があるといった大切な学びを得て少しずつ力が出てきて、やはり自分らしく生きたいと思うようになりました。

実は小学校の時、このクラスの男子の中でサッカー部に入りたい人はいませんかと聞かれて、本当はやりたいのに言えなかったことがありました。様々な学びを得た私は高校生になってようやくやりたいと口に出すことができました。そして髪を切り、スカートと化粧道具を捨ててズボンをまた買いました。本を読む中で子どもや教育に関わることに興味を持った私は高校の先生の勧めで近くの女子大に入学し、保健体育科の教員免許を取得しました。女子大は正直どうかと思いましたが、そこに入って良かったの

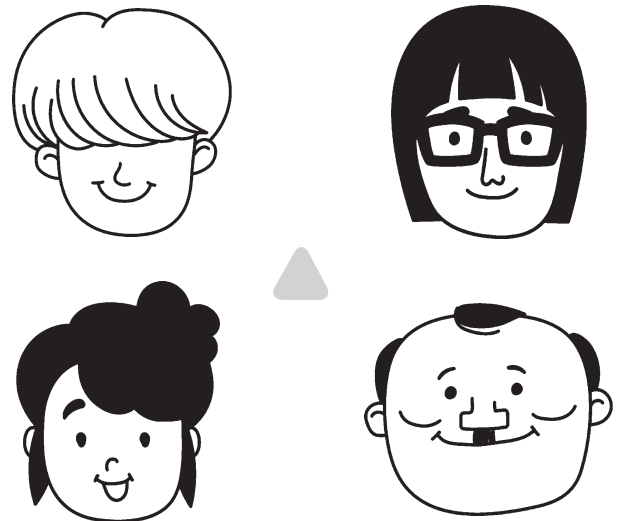
は同級生達がとにかく素晴らしかったことです。授業や実習に真剣に向き合う友人達を私はどんどん信頼し、リスペクトし、安心感を持てるようになりました。この人達になら話せるかもしれないと思い、涙ながらに私は性同一性障害かもしれないと伝えました。最初はすごく驚かれましたが、私達を信頼して言ってくれてありがとうとハグしてくれて、みんなで病院を調べたり、一緒について来てくれたりしたことは本当に今でも感謝しています。

その後両親にもカミングアウトしました。しかし父からそれは思い込みだ、そんなはずがないと言われてしまいます。そんなの教員採用試験で落とされるに決まっているとか、結婚しないで子どもも持たずに一人で生きていく覚悟はあるのかななどとも言われました。また心優しい母は自分を責めて、ちゃんと産んであげられなくてごめんなさい、お母さんの子育てが悪かったと謝るのです。母は号泣してその後、精神的に体調を崩してしまいました。妹達からもヒロちゃんがカミングアウトなんかするからお父さんが怒ったりお母さんが心の病になったりしたんだ、ヒロちゃんが悪いと言われてしまいました。社会にも家にも居場所がないように思えてその時すごく苦しかったです。

でもすぐに父から、それなら病院に行かなければだめじゃないかと言われ、行くとやはり性同一性障害と診断されました。ホルモン治療を始めると体の違和感は取れてきましたが、産毛が濃くなりハスキーボイスになってくると今まで以上に周囲からの視線を感じました。人混みで「今の男？それとも女？」と大声で言う人やコソコソ話す人もいて、街や人混みがすごく苦手になり、過呼吸発作で倒れるくらい精神的に追い込まれました。外見が変わるにつれて女子トイレも入りにくくなりましたが、当時はまだ女性戸籍なので男子トイレにも怖くて入れず、夏場でも本当に水分は取りませんでした。結局男性として仕事に就くことはできず、交通指導のお姉さんとして働き手術代を貯めると、父はそこまで覚悟が決まっているならと言って手術に付き添ってくれ、母や妹達も最後は応援してくれました。やはりみんな情報不足で心配だったのだと思います。手術後に私は裁判所で戸籍変更をして長女から長男に、ヒロコからヒロトになりました。しかし再び始めた就職活動では

面接官からそんな人は初めてだとか、どう対応していいかわからないと言われ悔しい思いをしました。戸籍まで変えたのに生きやすさは何も変わらなかったのです。結局男性として受け入れてくれた昼屋にようやく就職して職人として一生懸命働いていると、同僚や先輩達が、あなたの人柄や頑張りはよくわかった、今は社会の理解はまだまだだけど負けるなよと言ってくれました。私はこんな自分だからこそ同じように悩んでいる人の痛みが分かるのではないかと思ひ、医療専門学校で学んで資格を取り、自殺予防に関する支援や研修講演活動を始めることになりました。

もう一つ良かったのは専門学校でパートナーと出会えたことです。私は戸籍上は男性でも体は中性的なので不安もありましたが、パートナーはいつもそのままのあなたでいいんだよと言ってくれました。結婚してからも本当に大変でしたが、第三者から精子提供を受けて父親になることもできました。これまで結婚も家庭も絶対無理と言われてきましたが、私は自分らしく生きて幸せになるのに何が悪いのという気持ちを持ち続け、今こうして笑顔で過ごしています。男らしくとか女らしくというより、誰もがその子らしく、また自分らしく過ごせるように、今日の話が皆さんの現場で生かされることを願っています。子ども達誰もが本当にありのままの自分を大切に、されていると感じられるような環境を作っていくためには、皆さんのような大人の存在が非常に大事な命の橋渡しになります。ぜひ皆さんからも子ども達に色々な性やLGBTQの話をしていただければ嬉しいです。



■特別寄稿

身近な大人が理解者になってほしい

～性の多様性を前提とした子どもとの関わり～

一般社団法人にじず
代表 遠藤まめた

◆LGBTの子どもの孤立を防ぎたい

私が代表を務めるにじずはLGBT（かもしれない人を含む）の子ども・若者が安心して遊んだり話したりできる居場所を全国に展開している。札幌から岡山まで約10都市で開催しており、これまで3500名ほどが利用してきた。

「初めて行ったときに人が沢山いるのを見ただけで、自分だけではないのだと安心できた」「見た目や名前で性別を判断されないのが本当に嬉しかった。普段は女性として生活しているので、ここでだけはありのままの自分でいれるなと思った。」「楽しい、困ったことがあっても次ににじずで聞けばいいとか話せばいいと思うと必要以上に悩まない。」居場所にやってくる子どもたちは、このように語る。



にじずで参加者たちがやっていることはゲームやおしゃべり、お絵描きなど他愛のないことだ。LGBTの話題ばかりが話されるわけでもなく、「このアニメに最近ハマっている」とか「部活の練習がきつい」などさまざまである。学校の休み時間にも似ている。他愛のないやりとりだが、こうして安心して話せる場を求めて子どもたちはやってくる。

LGBTの子どもたちは不登校の割合も高いため、学校に通っていない参加者にとっては同世代と交流できる貴重な機会にもなっているようだ。

個人差はもちろんあるが、にじずに来る子どもたちは自分が悩んでいることを学校でもなかなか言えない傾向にある。親にカミングアウトしていない子どもたちもいる。親に否定されることが一番つらいので、親へのカミングアウトはとてつハードルが高いと感じる子どもが多い。カミングアウトを受け入れて居場所まで送り迎えをしてくれ

る親もいるが、心ない言葉をぶつけてくる親もいる。

「テレビを見ているとき、LGBTの人にひどいことを言っていたから、自分は一生親には言わない」と肩を落とす子どもたちもいる。家族の事情もそれぞれである。

LGBTの話題は近年ニュースなどででも取り上げられる機会が増えた。しかし、いまだに当事者の子どもたちの多くは「自分のような人は他にはいないのでは」「家族に話して拒絶されるのが怖い」と感じている。「一度でもいいから、自分と似たような人と話してみたい」という切ない気持ちを抱えて居場所にやってくる参加者もいる。入り口で立ち止まってしまったり、そこからなかなか先に進めない。あるいは、実際に人がたくさんいる様子を見て、感極まって泣き出してしまったりする子どももいる。それだけの切実な環境がまだまだある。

NPO法人ReBitが実施した「LGBTQの子ども若者調査2022」によれば、孤独感を「しばしば」あるいは「常に」感じたと回答した12-19歳は、性的少数者の場合に29.4%で、内閣府実施の調査での一般値に比べて8.6倍も高かった。深刻な状況である。

◆安心して話せる大人を増やそう

にじずのような若年当事者向けのコミュニティは全国に少しずつ増えている。とはいえ、このような居場所は都市部に集中しがちで、また保護者に理解がない場合などには子どものアクセスが難しいといった課題がある。中学生などは居場所に参加したいと思っても、交通費をお小遣いから捻出するのが難しい。あるいは行き先を親に言えず参加できないと感じている場合がある。もともと横浜には特定非営利活動法人SHIPが主催するLGBTの子ども若者の居場所があったが、そこに通うために高校生がアルバイトをしていると聞いたのが、にじずが池袋で始まったきっかけの一つである。

にじずでは、2024年からはメタバースを利用して、自宅のパソコンやスマホから音声やチャットで居場所に参加できる「バーチャルにじず」の取り組みも始める予定だ。子どもたちにとっては自分の好きなアバターで、匿名かつ顔を出さずに交流できることは心理的ハードルが低く、支援につながる窓口としてうまく機能できればと期待して

いるところだ。



とはいえ、メタバース空間だけで悩みや孤立を抱えた状況が改善されることはないので、安心して話せる他者と対面で出会えることが、若年の当事者たちにとって、かけがえのないことであることには変わりない。

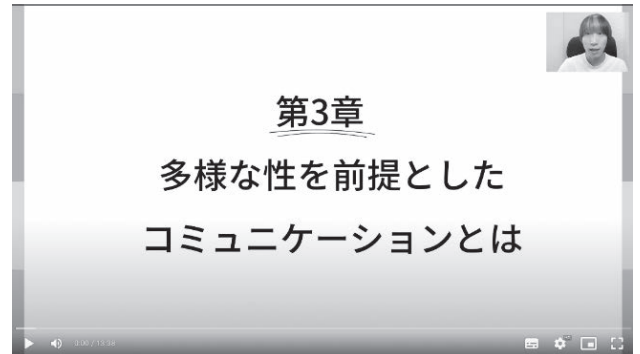
当事者のコミュニティが身近に存在しなくても、性の多様性について前向きな情報発信を行い、性別での決めつけが少ない関わりができる大人がいれば、当事者の孤立を防ぐことは可能である。LGBTの人口についてはさまざまな統計があるが、国立社会保障・人口問題研究所による2023年調査では同性愛者とバイセクシュアル（同性にも異性にも恋愛感情や性的惹かれを経験する人）は合わせて2.2%、現在認識している性別が出生時に割り当てられた性別とは異なる、あるいは違和感があると答えたトランスジェンダーは0.6%だった。よく「クラスに一人はLGBTがいる」と言われるが、生活をしていく中ですでに何人も当事者に接している可能性は十分にある。

子ども若者支援に関わる大人の中には「LGBTのことは、なんだか難しいから専門の相談機関を利用してほしい」と考える人も少なくないだろうし、実際に専門のLINE相談などを相談者に伝えて、話してみるよう促している支援者もいる。その対応は決して間違いではないのだが、すでによく知っているの方が安心して話せると子どもが感じたり、知らないところに連絡してみるの怖いと感じて、リファーされても繋がらないことも多々ある。「当事者やLGBT相談の経験が多くない自分たちにもできることがあるのだ」という視点を持ち、日頃の子どもたちとの関わりの中で「まずは自分にできることはやってみよう」「聞ける範囲で話を聞いて、一緒に考えてみよう」という大人が増えることが重要だ。

◆ 性別を決めつけない接し方

取り組みを始めるにあたっては「すでに関わっている子どもたちの中にもさまざまな性自認や性的指向を持つ人がいる」という前提を自分が持つこと、一緒に活動をしている仲間と共有することが大事だ。「LGBTの子なんて見たことがないから」と思っているとしたら、それは「打ち明

けられたことがない」ことを反映しているだけで、たとえカミングアウトされたことがなくても当事者はこれまでもいたし、出会ってきたのだという認識を持つところがスタートラインになるだろう。



研修動画では、性別を決めつけないコミュニケーションのあり方、カミングアウトがあった際の接し方のポイントなどに触れている。

性別を決めつけないコミュニケーションのあり方は、すでに心がけている人もいれば、あまり考えたことのないという人もいるかもしれない。「男の子は/女の子は〇〇だから」という話し方は、性別に違和感のある子どもにとっては、望まない「らしさ」の強要や、自分のアイデンティティを否定されたような気持ちになり、そのようなコミュニケーションが生まれる場にはもう行きたくないと思えるほどの強烈な出来事になりうるし、すべての子どもにとって、自分らしくのびのび過ごすことを阻害するようで、なるべく避けたいものだ。ただ、自分ではやっていないつもりでも、ぼろっと出てしまうことは往々にある。「男の子なのにネイルしてるんだ、女子力高いね!」とか「女子ってそういうの好きだよね〜」とか、意図しなくても考えていることが漏れ出してしまうことがある。「いちいち女子とか男子とか、それって関係ある?」と相手はモヤモヤしているかもしれない。代わりに「ネイル好きなんだね!自分でやったの?」のように、別の会話ができないか考えてみることをおすすめしたい。

他にもできることはある。たとえば、おもちゃ、シール、持ち物、遊び、食器（子ども食堂の場合など）など男女で分けるのではなく自分が好きなものを選べるようになっていのかどうか、改めて見返してみてほしい。以前、子ども食堂の現状について話を伺った際に、食器やお箸が分かれているとか、キャラクターものについて、なんとなく「男の子はこれ」のように決まりがちという話があった。靴箱が男女で分かれているという話を聞いたこともある。不要なのに男女で分けているものはないだろうか。あるいは、必要がないのに性別を聞く場面はないだろうか。利用登録をするときに、利用者の性別を書かないと施設が利用できない場面がある。必要な場合もあるかもしれないが、

特にいない場合もあるだろう。ちなみに、私が住んでいるエリア（横浜市内）では、地域の公共施設の卓球ラケットを借りるのに、なぜか性別を選ばなくてはいけない。横浜市のスポーツセンターのトレーニング室を借りるときにもチケット購入機のボタンが男女で分かれており、改善してほしいと伝え、その後なくなったが、使いにくいと感じさせる性別区分は意外とまだまだあるように思う。

着替えを伴うアクティビティをするとき、男の子の集団/女の子の集団の中で着替えるのではなく、一人で着替えたいという子がいることを想定しておくことも大切だ。最近では一人用の簡易テントで、更衣室として利用しやすい商品もある。更衣室の中にカーテンを入れて試着室のように区画しプライバシーを確保するようにしたら、利用者から好評だったという話を聞いたこともある。性別に違和感がある人だけでなく、他のさまざまな理由で肌を露出たくない、見られたくない人がいるので、多様性に配慮という意味ではもっと広がって良い取り組みであると思う。

◆気をつけたいアウトティング

カミングアウトについては、大切なことを打ち明けてくれたことを受け止めると同時に、情報共有の範囲について気をつけたい。カミングアウトがあったときに「Aさんは、性別に悩みがあるから学校にいけないんだって」などと相談内容を本人の同意なく第三者に暴露することをアウトティングと言う。アウトティングは悪意がなくても、むしろ善意によっても起きる。「本人のためにも、別の人に話したほうがうまくいくと思った」とか「別にそのことを知って差別する人なんていないから大丈夫だよ」などの楽観的な考えでアウトティングが生じて、その結果、「信頼してようやく話したのに、やっぱり誰にも言わなければよかった」と本人を失望させてしまうケースを筆者もこれまで見てきた。

特に保護者に対して本人の同意なく情報共有を行うことは、家庭の中での居心地を悪化させ、当事者をさらに追い込むことに繋がりがかねない。「家族だからわかってくれる」とは限らない。むしろ一番の理解者であってほしい家族から「恥ずかしい」などと言われ、傷つけられている子どもたちがいる。家族は家族で、自分の子どもが当事者であることを誰にどう相談すれば良いかわからないし、赤の他人だった場合に比べても動揺してしまう場合がある。

きちんと受け止めるまで、10年近く時間がかかる場合だってある。

カミングアウトされたとき、もしどうしても自分一人で抱えきれない、誰かの助言を仰いでみたいと思うようであれば、相談を受けた大人がLINE相談や電話相談を使ってみるなどの工夫ができる。スタッフ間で情報共有をしておきたいと思うようであれば「～～という理由で、他のスタッフにもこの話を共有できたらと思うけど、あなたはどう思う？」のように本人の意見を聞いて、一緒に考えていく方法もある。このように、できることについてあらかじめ知識を持っていれば、いざカミングアウトがあったときにも落ち着いて適切に対応しやすい。

◆ぜひ大人の側からアクションを

安心して相談できる相手であることを示すには「カミングアウトされたら応援するよ」と心の中でひっそり思っているだけではなく、態度で伝えていくことが重要だ。子どもたちと話すときに性の多様性について話題にしたり、性の多様性のシンボルであるレインボーカラーのシールを名札につけるなどの工夫もできる。学校などでは昨今、性の多様性について扱ったチラシやポスターを廊下に貼ったり、保健室など相談を受ける機会が多いところにマンガをおいたりする事例が増えてきている。

何もないところから突然LGBTに関する話題を当事者があげることはハードルが高いが、何かモノがあれば「これって」と触れやすくなる。また、安心して話せる場所であることを自然と伝えることができる。子ども若者のいる施設で、性の多様性に関する絵本やマンガ（「りんごの色」という大分県が制作したものがウェブ上で閲覧可能）をおいてみるのも良いだろう。

今春に米国の支援団体Trevor Projectが発表した調査によれば、性的少数者に対して受容的な家族の場合には、直近1年での当事者の子どもの自殺未遂率が33%も低下するという。学校が受容的な場合には25%低下する。子どもを取り巻く環境がいかに重要であるか示されたデータだ。周囲に安心して話せる大人がいれば、それが教師や親でなかったとしても、子どもの命を救うことにつながるだろう。たくさんの大人に、ぜひ力を貸してほしい。

<参考>

にじーず研修動画 (YouTube)

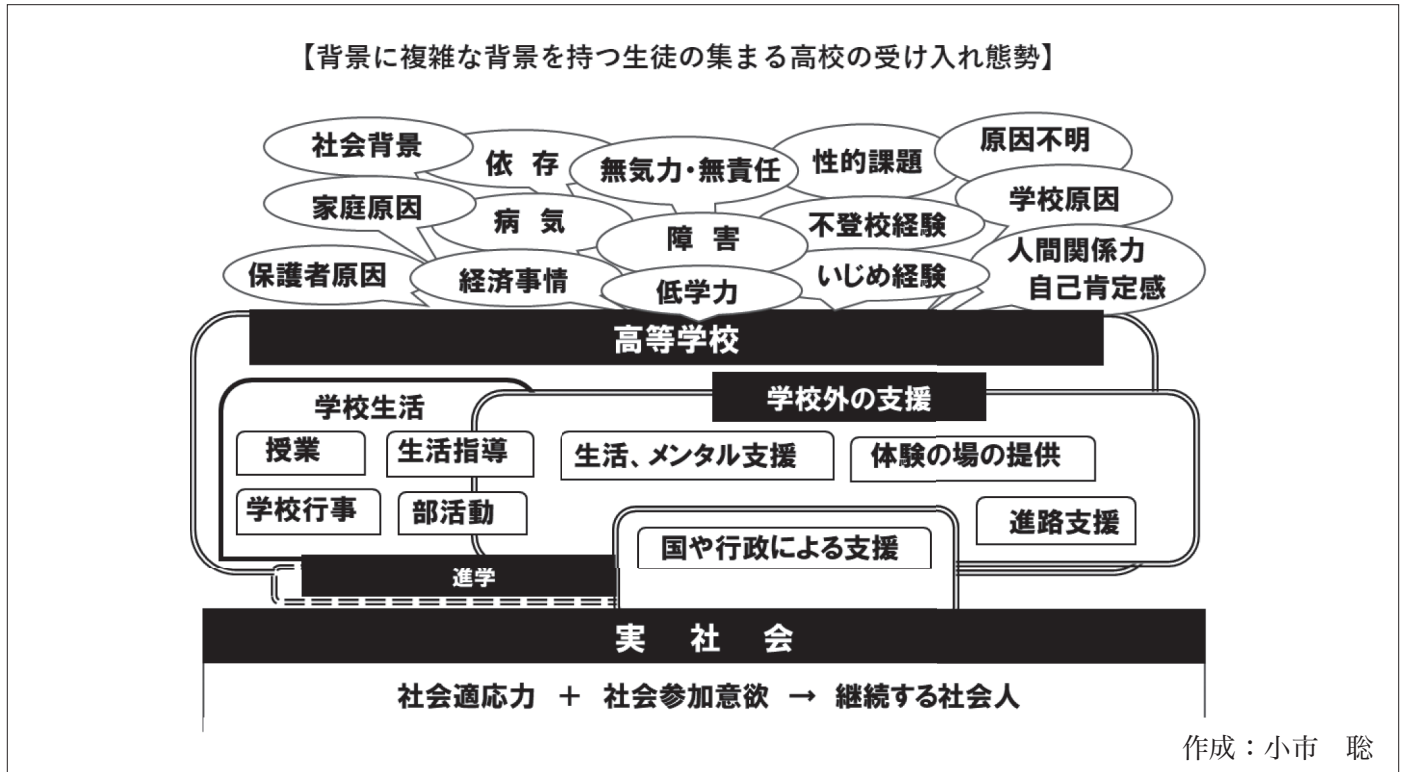
【青少年施設向け】「動画で学べるLGBT～子どもが自分らしくいられる居場所を増やすには」

<https://24zzz-lgbt.com/blog/keihatsu/>

学校教育に対する外部参入の必要性について

特定非営利活動法人 体験活動サポート開港場
代表 小市 聡

1. 現状



一クラス40人（定時制は35人）の中に以下のような生徒が実在する。担任はどうするのか。

- ① 生活保護を受けているひとり親家庭で、親子ともに軽度の障害を持っている生徒。
- ② 発達障がいがあり、授業中じっとしてられない生徒。授業がほとんど理解できない生徒。
- ③ 母親が3度再婚しており、その配偶者との折り合いが悪く、家に寄り付かない生徒。
- ④ 1Kのアパートに父母と兄弟5人が暮らしていて、学習する環境がない生徒。
- ⑤ 母親の再婚相手から性的暴行を受けているが母親は黙認している状況の生徒。
- ⑥ 不登校で連絡の取れない生徒。
- ⑦ 親が放任状態で同級生らに威圧的な態度をとる生徒。
- ⑧ LGBTQに悩む生徒。
- ⑨ 妊娠中の生徒。
- ⑩ 人に興味を示さず、緘黙を貫く生徒。コミュニケーションをとらない生徒。
- ⑪ 親の学校へのクレームが長期間継続している生徒。
- ⑫ 不安がメンタルを支配していて人の言葉に過剰に反応する生徒。
- ⑬ 異性に対する執着が強く、ストーカー行為を繰り返す生徒。
- ⑭ 自殺もどきを繰り返す生徒。
- ⑮ 絶えず嘘や注目されるための話をする生徒。ごまかすことが日常になっている生徒。
- ⑯ 学校外の友人（中学仲間、SNS等での知り合い）との問題行動がある生徒。
- ⑰ 犯罪に手を染める、巻き込まれる生徒。
- ⑱ 学校や教員を敵もしくは信頼できないと思い込んでいる生徒。

これらに加えて教室には通院を余儀なくされる、いわゆるやんちゃに引きずられる、いじめ、強いこだわりがあるなどまだまだ続く。上記の生徒は現実に存在した生徒である。同じクラスに10人以上存在しており、指導に至ることはかなり難しい。もちろん学年や保健室、生活指導分掌、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等による指導もあるが直接生徒や保護者と対面する担任の負担はかなり大きい。

生徒を理解する場合は授業のほかには学校行事がある。しかし、その学校行事も縮小傾向にある。原因の一つは教員の働き方改革にもある。教員の負担軽減自体には大いに歓迎されるべきことだが、業務内容がさほど軽減されず、残業時間の縮小だけが重視されている。授業は学習指導要領により細かく内容から授業時間数まで規定されているのに対して、行事の実施内容や時間に関して細かく規定されていない。よって、この行事部分が見直しの対象となり削減されていくことは既定路線である。生徒個々の理解や社会適応を学ぶ機会が失われるだけでなく、行事の必要性においても疑問視する声が出たり、そもそも論にまで発展してしまう話も聞く。このままでは将来的に体育祭、文化祭、修学旅行、遠足などはその内容が簡素化し、インターンシップや学校外での探求活動、さらに社会体験、就業体験など規定のないものに関しては簡略化もしくは自然消滅していくと思われる。

このように多様化の必要を認めながら1クラス40人態勢が変わらないこと、働き方改革に教員の精神的な負担解消策が不十分であること、残業を処罰するような傾向が生徒と接する時間減になること、多様化や様々な障がいに対する専門知識を身につける時間がないこと、文科省からの際限ない新しい教育の実践が求められることなど多様化への対応どころか課題の解消を目指した個々の教員が考える創造的な実践にも支障が出てくる。学校の中だけで多様化に対応する前提が整っていない状況がある。

2. 対策

ではこのような現状の中で今後を考えた場合、生徒の多様化を受け入れるに留まらず、卒業後の世界への適応も考えた支援はどのようにあるべきか。直近の結論はクラス人数を半減し、担任を3人にする。学習担当、生活担当、心理士を1クラスの担任とする。3人は対等の関係で生徒に関与する。このシステムを使う広域通

信制高校は実在する。しかし一般の学校、特に公教育では予算の問題として一蹴されるであろう。もちろん教育委員会も学校も解決に向けて努力しているが人も予算もなく学校だけで解決することは難しい。それを担えるのが学校外部からの支援である。既に修学旅行を旅行業者に依頼、進学データの入手を受験業者に依頼している。それと同様に考えれば容易なことである。最近では部活動も外部委託になりつつあり、教員以外の一般人が部活動を通して教育との接点を持つことになった。このような流れから生徒の多様化に応じた居場所作り、専門機関との接点作り、社会体験や就業体験なども外部に委託されるようになるはずである。学校にとっては教員の負担軽減、生徒にとっては今まで学校の範囲では賄いきれなかった分野にも入り込むチャンスとなる。このように地域も含めて外部を積極的に活用することは文部科学省も奨励しており、教育は全て学校が担う形から外部も活用する形へと柔軟な考え方が求められていく。この時点で様々なノウハウを持つ個人、団体が教育現場に求められることになる。

3. 留意点

このように地域を含めた外部と学校が協働していく場を継続、発展していくための留意点がある。一つめは指導である。生徒とのかかわりの中で生徒から相談、思い、愚痴、他者批判など様々な問いかけがあり、回答を求めてくる。このときの回答のうちに軋轢を生む可能性がある。外部の団体にはそれぞれの設立趣旨があり、生徒への思いが強ければ強いほど、学校の不備や至らなさも見えてくる。それでも自分の思いを生徒に直接伝えるのではなく、最終責任を持つ学校の担当者に伝えて反映させることが継続につながり、より多くの別の生徒を救う結果につながる。日頃のコミュニケーションや将来的な方向転換はであると予測されるが現時点では指導は学校側にゆだねるべきである。

二つめは予算である。NPOなど資金を補助金に頼る場合、おおむね3年が限度である。活動も3年で終了するのではなく、他の資金への移行のための計画も事前に立てておく必要がある。

三つめは個人情報管理である。メモも含めて記録はすべて外部に持ち出さないことや学校外での会話も注意を払う必要がある。特に学生をスタッフとする場合、授業や論文などへの反映は事前の相談が必要である。また生徒とのメール等にも配慮が必要である。

最後に、生徒の支援に携わる人たちにも当然、感情は入る。悪いことではないが自己の感情を俯瞰し操作できることが必要である。加えて嫉妬、優越感は要注意である。

4. 事例

最後に横浜市立横浜総合高校の事例を紹介する。横浜総合高校には生徒の居場所カフェとして「ようこそカフェ」がある。6年前に横浜市大の高橋寛人教授とよこはまユースが当時の校長に申し入れを行い、週1回水曜日の午後に実施された。当初はよこはまユースを軸としてメンタル、外国籍関連、障がい専門とする4団体でスタートした。翌年、元横浜市教育委員の長島由佳氏が食事を提供し、さらに翌年に次の校長が中心となって就業体験を企画、デートDV対応の団体も加わった。食事の提供により、立ち寄る生徒の滞在時間が増え、全生徒約1,000人に対して最近では300人以上が訪れている。カフェでは大学生から70代まで幅広い年代のスタッフが、様々な生徒の悩みや課題に対応している。生徒からの情報はその日のうちに副校長に報告されることによって、学校とカフェの情報共有ができています。

設置の成果としては、学校内で本音を語れる場がで

きて気軽に相談できるようになった。ときには課題のある生徒に対する見方が学校側とカフェ側で異なることもあるが、情報を共有しながら指導は学校が行うことにしているため、問題になることはない。退学を考える生徒がカフェで救われて無事卒業していくケースも多々ある。

就業体験においては、主に農業体験を県内外で年3,4回企画している。参加生徒の視野を広げ、自己存在感を持たせ、作業する中で課題を発見し、解決策を自ら考える、解決に至る中で様々な人とのコミュニケーションをとり、社会適応力を身に付けさせることを目標としている。参加生徒の中には、ひとり親であったり、経済的困窮家庭であったことから、幼少時代に動物園や遊園地、旅行に行ったなどの経験がないことで物事に感動する感覚が弱く、人に対しても積極的なコミュニケーションをとらない生徒もいるが、協同での作業、その職業の人からの話を聞くことによって社会に目を向けていく結果が現れている。さらによこそカフェの強みは、教員が食事を出す手伝いをしていたり、生徒と雑談をする目的で立ち寄ることである。運営資金を継続的に得ていること、そして何よりスタッフにやりがいと使命感があることがカフェを継続・発展させて生徒の安定をもたらしている。

〈ようこそカフェ〉



〈就業体験〉



小市 聡氏プロフィール

前横浜市立横浜総合高等学校校長。現在は特定非営利活動法人体験活動サポート開港場かいこうばの代表として横浜総合高校の「ようこそカフェ」を支援。カフェでは就業体験を担い、卒業後を見据えた社会適応力を身につける体験の場を提供している。現在、体験の場の提供は神奈川県内4高校に拡大。

一人ひとりの個性を大切にしながら多様性を尊重できる場

一般社団法人かけはし
代表理事 廣瀬 貴樹

1. こどもたちの生きづらさ

「すべての子どもが素晴らしい個性と可能性をもって
いる」

教員として子どもたちと向き合った14年間の中でも、退職してからはじめた居場所づくりの中で寄り添った約3年間の中でもその信念は決して揺らぐことなく、私の心の中にしっかりと刻まれています。

しかしながら、学校生活の中では子どもたち一人ひとりが自分の個性をありのまま出せているかという、それはとても難しいことであるように思います。

学校生活では集団の中で様々なルールがあり、一斉授業があり、決められた時間軸があります。それに合わせて、自分の個性を發揮できる子もたくさんいますが、一方でその枠やルールに苦しみ、生きづらさを感じる子もいます。教員時代には、そういった子に「自分は担任として何ができるのか」自問自答を繰り返す毎日でした。

そして、学校に行けなくなり、不登校になってしまう子の存在。一人の子は、私に「学校に行くともた誰かを傷つけてしまうかもしれない。だから自分は一人で生きていくと決めた」と話してくれました。その子は、これまでの学校生活で、何度も友達とトラブルになり、その度に心を傷めていたのです。

学校という場が、その子にとっての安心できる場にならず、結果的に自分を追い込んでいく場になってしまうことがある。そして、人との関わりを避けるようにして一人になり、孤独になっていく。みんなと同じように学校に行



けていない。みんなと同じようにできない。自分はダメだ。自己否定感を強くしていく子どもたちがいます。

私は、その子にとって安心できる居場所を学校以外にも作る必要性を強く感じました。私たちが一人ひとりの「個性」に合わせるような居場所です。

かけはしの居場所は、その子の生きづらさにとことん寄り添う場であり、その子の「個性」を尊重し、その子の「思い」を大切にする場としてスタートしました。

2. その子らしさ

これまで私は「個性」を他の言葉に置き換えて捉えてきました。それは「その子らしさ」「持ち味」「自分色」という言葉です。その中でも、「その子らしさ」という言葉は、私が教員時代に強く学んだ言葉であり、こどもたちを居場所で見つめるときに、一人ひとりの子の居場所での姿からその言葉を見つけます。



丁寧さ、誠実さ、几帳面さ、こつこつ、じっくり、ゆっくり、向上心、行動的、礼儀正しさ、友達思い、情の深さ、気遣い、感受性が強い、勇気、根気強さ、挑戦、冷静さ、情熱的、哲学的、家族思い、いつも目を見て話す、独創的、アイデアが豊富、ユーモアがある、芯がある、などなど。

一人ひとりに、本当に様々な「その子らしさ」があり、居場所ではそれを大切にするためにスタッフとボランティアで共有している理念があります。それは「土になりたい」です。

3. 土になりたい

農園では、よい土（環境）があれば、作物は自然に伸びていくことと同じように、人間もまたよい土（環境）があれば、自然に成長していくものであると信じています。

私たちは、こどもたちが、「その子らしさ」を輝かせながら、伸びていくことを支えていける土になりたいと考え、居場所の中で、その子にとっての安心して居られる「環境づくり」を大切にします。私たちは、個性の異なる一人ひとりが安心できる環境を考え、できる限りの環境づくりに



徹しました。安心感があってはじめて、その子にとっての「居場所」となり、その子が「自分らしさ」を取り戻しながら、居場所の中で自分づくりをしていく姿があります。この理念は、簡単にできるものではないと感じています。なぜなら、大人はついこどもたちに進むべき方向を指したり、大人が正しいと思うところに導いたり、先走ろうとしたりするからです。

4. こどもたちを信じて待つ



これができなければ、土になることは難しいです。その子の成長も、その子のペースがあること、その子自身が伸びたい方向を決めること、その子自身が自分の道を

自分で切り拓こうとすること。

それらを居場所の中で貫き、一人ひとりを見守る姿勢がなければなりません。

居場所では、こども同士がぶつかり合うことも当然あり、まさに個性と個性が対立する場合があります。居場所のスタッフやボランティアは、対立の解決を図ろうと仲介することはしません。互いの話を聴いて寄り添うことはあっても、「どうしたいか」は自分たちで考え、それを見守ることを大切にします。こどもたち同士で問題解決をする力こそが、本当の「生きる力」となると考えているからです。私たち大人は見守ることで、こどもたちが自らの力で伸びていくことを支えたいと思っています。

5. 多様性の中で生きること

居場所に来る子たちは、小学1年生から中学3年生までがいます。更にボランティアは、高校生から大学生、専門学校等の学生さんもいれば、40代以上の方から90代の方まで年齢も様々な方々が来てくれています。年齢もばらばらな人たちが、同じ空間にいること。そんな空間では、互いに比べたり、競争したりすることなどありません。子どもも大人も、年齢関係なく、「一緒に楽しむ」ということが何よりも大事なこととして居場所の中で息づいています。

居場所には、発達障がいの診断を受けている子がいます。しかし、私たちはその子たちを「発達障がいの子」として関わることはありません。もちろん発達障がいについての理解や見識を深めたり、学んだりしてきたことがあるというのが前提の話なのですが、私たちは、居場所に来ているすべての子を、「素晴らしい個性をもった一人の子」として関わります。

自分の気持ちをコントロールできなくなったり、自分の気持ちをうまく伝えられなかったり、そんな瞬間が、居場所の中で起きることが当然あります。そんなときに、「この子は発達障がいの子だから……」というようなまなざしで私たちがその子に関わっていたらどうなるでしょ

うか。それを見た他の子どもたちが、大人のまなざしを鏡にして、同じまなざしをその子に向けることになります。

私たちの“まなざし”がどうあるのか、ということが大きく問われていると思うのです。

発達障がい診断を受けている子が、特徴ある行動をした際も、わたしたちは動じることなく、気持ちを受け止め、その子が安心して過ごせる手立てを考えます。そして、その子が安心できるまで話を聴いたり、そっとそばにいたりしてとことん寄り添います。それは、すべての子に対しても、変わらずにあり続ける私たちの“まなざし”であり、わたしたちの“あり方”なのです。



6. 伴走者

伴走者としての私たちのあり方は、多様性を尊重できる場をつくるうえで、非常に大切であると考えています。

私たちは、その子を絶対に一人にはしません。その子がどんな状態でも、どんなに苦しくても、どんなに生きづらさを感じていても、そばに居て、一緒に悩み、一緒に苦しみ、一緒に楽しむ人になりたいのです。

多様性を尊重できる場とは、その子らしさが輝く場でもあります。かけはしの居場所に2年間通って卒業した子が、ボランティアとなって帰ってきてくれた時に、かけはしに来ている子どもにもメッセージをくれました。

「かけはしに来ている間は楽しんでほしい。ここに来てまで暗い顔は見たくない。楽しむことが大切。」

「(かけはしに) いるだけで楽しいでしょ。それぞれ個性が溢れているから。」

その子は、自分の個性もわかっているし、他の子の個性も認めているからこそ、個性が溢れていると話していること。そして、個性が溢れている場所は、いるだけで楽しいというその子の言葉は、私たちにとって何よりの励みと希望になる「魔法の言葉」でした。これからも、子どもたちと共に、一人ひとりの個性を大切にする居場所をつくっていく決意です。



廣瀬 貴樹氏プロフィール

- ・一般社団法人かけはし代表理事、40歳。
- ・横浜市で14年間、公立の小学校教員として勤務。2021年3月に退職。
- ・不登校の子どもたちの居場所づくりを行うため、2021年5月に一般社団法人かけはしを設立。
- ・2023年10月には横浜市教育委員会より教育支援センター「ハートフル西部」を受託。他にもわくわく農園事業、キャリア教育事業、コミュニティカフェ事業（就労支援や学習支援）など、様々な事業を展開する。

子どもの未来をつなぐ「かけはし」に

～一般社団法人かけはし 代表理事 廣瀬貴樹さんへのインタビューを通して～

神奈川大学 国際日本学部 日本文化学科
中家 未優

一般社団法人かけはしの代表理事を務める廣瀬貴樹さんは、横浜市泉区を拠点に、子どもが安心して過ごせる居場所づくりを行っています。「自分の持ち味を活かしながら、泉区という1つの街をあたたかい街にしていきたい」と話す廣瀬さんに、これまでのかけはしの活動や今の思いについて、お話を伺いました。

▷「かけはし」設立の経緯について教えてください。

『活動を始めたのは、2021年4月です。泉区にある横浜市下和泉地域ケアプラザの一室を借りて「まなべるいばしょ かけはし」の活動を開始しました。最初の1か月で、空き家を活用したコミュニティカフェなども始め、一気に動きましたね。5月に入ると、通ってきている子どもの数も徐々に増えていきました。そこで、「もっと居場所をつくってほしい」という子どもの声にも後押しされ、一般社団法人として法人登記を行い、本格的な活動を開始しました。同じく元教員である妻と友人の3人で団体としてのスタートを切り、現在は11名の理事で運営をしています。』

▷「かけはし」での活動の概要を教えてください。

『登録制の居場所事業「まなべるいばしょ かけはし」では、主に不登校の子を受け入れ、義務教育段階にある子どもたちが「教育」を受けられるように環境を整えています。対象は、小学校1年生～中学校3年生の子どもたちです。曜日によって活動場所が異なる変動制の居場所で、いちようコミュニティハウスやいずみ野地域ケアプラザなど、広く地域と連携することで、多様な人とのつながりを生み出せるようにしています。その他、就労支援を行なっているコミュニティカフェ「かけカフェ」の運営や、農業体験ができる「わくわく農園」の運営を行い、居場所事業に登録していない子の参加も可能です。

活動の拠点である泉区は、横浜市の中で最も農地面

積が大きく、地域資源が豊富な場所です。下和泉ケアプラザから歩いて行ける湧き水の森で、生き物の写真や木洩れ日の写真を撮る自然体験学習のような取り組みを行ったり、横浜市認定歴史建造物がある天王森泉公園では、稲作体験を行なったりしました。この地域は畑や田んぼ、森や川など、地域の自然と関わりながら生活できる、それだけでも豊かな財産です。居場所は地域の中にあるもの、私も地域の中でできる豊かな体験や人との出会いには敏感でありたいと思っています。』

▷廣瀬さんが活動を始めたきっかけを教えてください。

『学校現場では、不登校の子どもや生きづらさを抱えている子たちに、とことん寄り添いたいと思っていましたが、学校の中だけでは、支援の限界があることを実感しました。支援が行き届かなかったときの無力さや虚しさを感じた時、「学校の中だけで頑張るのではなく、地域の中の色々なつながりの中で、子どもと向き合うことが出来れば、その限界を越えられるのではないかと感じるようになりました。』

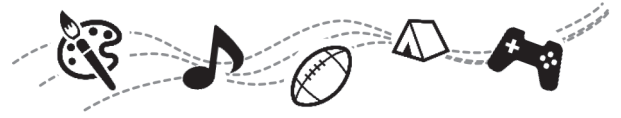
大学時代、「居場所づくり」や「普通とは何か」が共同研究のテーマでした。ゼミの卒論作成時には、夜間中学がフィールドワーク先だったこともあり、その頃から、学校の中だけではない、外の居場所という視点を意識していました。専門である社会科は、世の中をつくっている色々な人を知る教科です。教員時代にも、出来るだけ子どもが色々な出会いを経験できるようにしていましたし、学校内にある畑の畑主任をしていたときには、地域の人とのつながりを大切にしていました。色々な人たちに支えられて、今の社会が成り立っていることも肌で実感していたので、地域に目を向けることが出来たのは必然でした。

子どもたちと自分自身の関わり方を考えた時に、自分のできることは、居場所づくりを通して、子どもたちが生きていくための「かけはし」になることだと気付きました。子どもと色々な人との出会いのかけはし。子どもと子どもの将来を繋げるかけはし。そして、子どもと社会のかけはしになること。「かけはし」という団体の名称には、居場所づくりを通して実現したい想いを込めました。

高校生の体験活動等に関する実態調査

■ 調査の目的

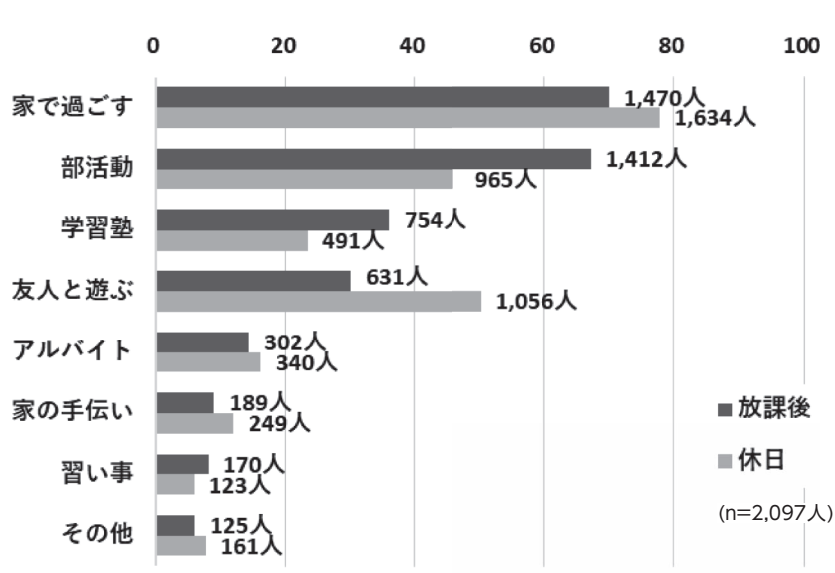
コロナ禍を経て青少年を取り巻く環境も変化し、新たな活動を求める高校生も増えてきています。高校生が生活の中で楽しく充実していると感じてもらうために、そして今後の事業や市内施設充実の参考にするため、横浜市立高校に通う生徒を対象に、体験活動と施設の利用状況に関するアンケート調査を実施しました。



■ アンケート集計結果（抜粋）

《放課後や休日の過ごし方について》

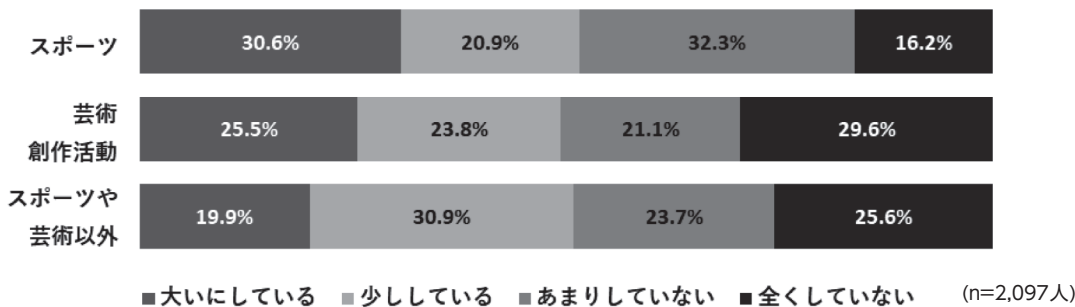
▶ あなたは〔放課後〕〔休日〕は主に何をして過ごしていますか。（3つまで選択）



☞ 放課後・休日ともに最も多かったのが「家で過ごす」でした。放課後は7割近い人が「部活動」をしており、約3人に1人は「学習塾」に行っています。一方で、学校が無い休日は約半数が「友人と遊ぶ」と回答し、放課後より増えています。「アルバイト」や「家の手伝い」をしている人の割合は放課後と休日では余り変わりませんでした。「その他」の中で最も多かった回答は放課後、休日ともに「勉強」で、学校のない休日は趣味の活動をしたりスマホ・ゲームなどで遊んだり、家族と買い物に出かける人がいました。

《体験活動について》

▶ あなたは最近、〔スポーツ〕〔芸術・創作活動〕〔スポーツや芸術以外の体験活動〕をしていますか。（一択）



☞ どの体験活動も、「している」人と「していない」人の割合はだいたい半数ずつで、活動の種類による差はあまり見られませんでした。

データで見る青少年

- ▶ (〔スポーツ〕〔芸術・創作活動〕〔スポーツや芸術以外の体験活動〕を「大いにしている」「少ししている」と回答した人へ) 体験活動をする理由や目的は何ですか。(複数選択)


順位	スポーツ n=1,080 (人)		芸術・創作活動 n=1,034 (人)		スポーツや芸術以外 n=1,064 (人)	
1	趣味として、楽しいから	76.6%	趣味として、楽しいから	85.3%	趣味として、楽しいから	89.4%
2	体力をつけるため、健康のため	55.5%	なんとなく、暇つぶし	27.1%	なんとなく、暇つぶし	33.7%
3	友人や仲間を増やすため	27.3%	知識や教養を身につけるため	16.8%	知識や教養を身につけるため	25.8%

- ▶ (〔スポーツ〕〔芸術・創作活動〕〔スポーツや芸術以外の体験活動〕を「大いにしている」、「少ししている」と回答した人へ) 体験活動をする上で悩んでいることや困っていることは何ですか。(複数選択)

順位	スポーツ n=1,080 (人)		芸術・創作活動 n=1,034 (人)		スポーツや芸術以外 n=1,064 (人)	
1	特になし	40.4%	特になし	40.5%	特になし	44.5%
2	時間がない	37.3%	時間がない	37.2%	時間がない	39.2%
3	場所がない	21.3%	お金がない	23.8%	お金がない	24.9%

- ▶ (〔スポーツ〕〔芸術・創作活動〕〔スポーツや芸術以外の体験活動〕を「余りしていない」「全くしていない」と回答した人へ) 体験活動をしていない理由は何ですか。(複数選択)

順位	スポーツ n=1,017 (人)		芸術・創作活動 n=1,063 (人)		スポーツや芸術以外 n=1,033 (人)	
1	時間がない	52.0%	興味がない	40.0%	時間がない	41.3%
2	苦手	44.0%	時間がない	34.8%	特になし	31.6%
3	興味がない	38.4%	苦手	25.7%	興味がない	27.3%

 活動の目的はどの活動でも「趣味として、楽しいから」と回答した人が最も多くなりました。スポーツは「体力をつけるため、健康のため」と回答した人が5割を越えており、他の活動と異なり明確な目的をもっている人も多く見られました。困りごとで共通して多かったのは「特になし」「時間がない」でしたが、スポーツでは専用施設や一定の広さを必要とすることがあるので「場所がない」がその次に入り、芸術・創作活動やスポーツや芸術以外の創作活動では「お金がない」が入りました。「時間がない」は活動していない理由でも上位に入り、高校生が忙しい日常を送っていることが伺えます。



《施設の利用状況について》

【地区センター】(市内81カ所)

体育室や会議室、図書コーナーなどを備えた市民利用施設。地域の人が誰でも利用できる。

【青少年の地域活動拠点、青少年交流・活動支援スペース(さくらリビング)】(拠点・さくりび)(市内8カ所)

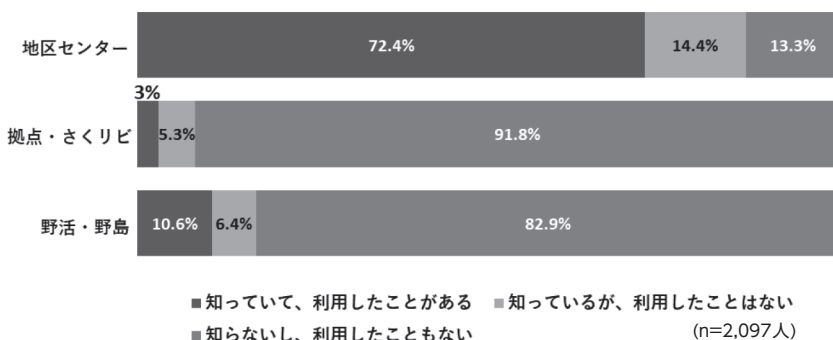
中・高校生世代を中心とした青少年が自由に過ごせる居場所。フリースペースや学習コーナー、音楽スタジオなどを備え、さまざまな体験機会の提供もしている。


【青少年野外活動センター、野島青少年研修センター】(野活・野島)(市内4カ所)

宿泊型青少年施設。学校の宿泊体験や青少年団体の研修などで利用されることも多い。




- ▶ あなたは〔地区センター〕〔青少年の地域活動拠点・さくらリビング〕〔青少年野外活動センター・野島青少年研修センター〕を知っていますか。また、利用したことがありますか。(一択)



 地区センターは市内全区に計81ヶ所、拠点とさくりびは市内8区計8カ所、野活と野島は市内4区計4カ所に設置されており、施設数の差が認知度や利用経験の数値にも表れました。居住区別のデータでは、拠点・さくりびや野活・野島がある区に住んでいる人は施設の認知度が高く、利用経験がある人の割合も多い傾向も見られました。

▶ (各施設を利用したことがある人へ) あなたは施設をどのような活動や目的で利用していますか。(複数選択)


	地区センター		拠点・さくりび		野活・野島	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
回答者全体	n=1,518人		n=62人		n=223人	
放課後や休日の居場所	709	46.7	22	35.5	19	8.5
自習や勉強の場所	612	40.3	14	22.6	0	0.0
学校行事や部活動	134	8.8	8	12.9	131	58.7
イベント参加	129	8.5	15	24.2	45	20.2
サークルや習い事	104	6.9	8	12.9	36	16.1
スタジオ利用	0	0.0	3	4.8	0	0.0
相談	7	0.5	0	0.0	0	0.0
その他	214	14.1	3	4.8	19	8.5

 地区センターと拠点・さくりびは「放課後や休日の居場所」や「自習、勉強の場所」など日常の活動場所として、野活・野島は「学校行事や部活動」で多く利用されていました。また拠点・さくりびと野活・野島は「イベント参加」のために利用している人も見られました。市内には高校生が利用できるさまざまな施設があります。それぞれの施設の特色や活用方法をもっと高校生に知ってもらい利用が広がれば、放課後や休日の過ごし方の選択肢もさらに増えそうです。

▶ 【クロス集計】

〈施設の利用経験・利用頻度の状況〉×〈体験活動の状況〉

施設の利用経験 頻度	体験活動の 種類	回答者全体		スポーツを している人		芸術・創作活動を している人		スポーツ・芸術 以外をしている人	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
回答者全体		n=2,097(人)		1,080	51.5	1,034	49.3	1,064	50.7
地区センター	利用経験あり	1,518	72.4	837	77.5	727	70.3	770	72.4
	うち月1回以上利用	232	15.3	163	19.5	113	15.5	136	17.7
拠点・さくりび	利用経験あり	62	3.0	37	3.4	37	3.6	32	3.0
	うち月1回以上利用	15	2.4	10	27.0	10	27.0	6	18.8
野活・野島	利用経験あり	223	10.6	127	11.8	104	10.1	131	12.3
	うち月1回以上利用	9	4.0	7	5.5	5	4.8	6	4.6

 施設の利用状況と体験活動の関係を見ると、体験活動をしている人は施設の利用経験や利用頻度が多い傾向がありました。特にスポーツをしている人は回答者全体と比べると、地区センターと野活・野島の利用経験・利用頻度の割合が高い傾向が見られました。一方で、芸術・創作活動をしている人は、他の活動をしている人に比べて、拠点・さくりびの利用経験・利用頻度がやや高い傾向が見られました。

● 調査の概要 ●

- ◆調査方法 Google FormのQRコードを記載した調査用紙を学校に送付し、生徒に配布しました。
- ◆回答期間 2023年6月26日～2023年7月10日 ◆対象者 横浜市立高校生徒7,514人(2023年5月1日付在籍数)
- ◆回答人数 2,097人(回収率27.9%) ◆調査監修 土屋 隆裕(横浜市立大学)

全ての質問項目と集計結果を掲載した報告書はよこはまユースのホームページからダウンロードできます。
<https://yokohama-youth.jp/survey/>

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA EYE'S 2023

2024年3月 発行

■ 編集・発行

公益財団法人よこはまユース

〒231-0011 横浜市中区太田町2-23 横浜メディア・ビジネスセンター5階

TEL: 045-662-4170 FAX: 045-662-7645

Mail: kikaku@yokohama-youth.jp

URL: <https://www.yokohama-youth.jp/>
